
闇夜に咲く、紫の華

甲斐仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜に咲く、紫の華

【Zコード】

Z5453C

【作者名】

甲斐仁

【あらすじ】

ふと気づけば、そこは見知らぬ街路地だった。男は、なぜここにいるのか思い出せないまま歩き出し、そこで、一軒の喫茶店を見つける。

ふと、気づけば見知らぬ街路地にいた。

「…なんだ、ここ」

軽くため息をついて、周囲を見回す。

歩きつつ、自分が先ほどまで何をしていたのか思考を巡らせる。

思い出せない

確か、彼女と一緒に旅行へ行つたはずなのだが。
旅館に止まることとなつて、それから…記憶が途絶えている。

「ん？」

いつの間にか、目の前に喫茶店があつた。

ここで、聞いてみるか

早く戻らないと、沙希が心配する。

「というかここ、やつてんのかな」

窓から覗き込んでみると、中には誰もいないようだ。

周囲を見回すが、辺りはただ街路地が真っ直ぐ続いているだけで、
何も無い。

「…なんだんだよ、ここは」

ぶつぶついいながら、仕方が無く喫茶店のドアを開く。
からん、と鈴がなり、首だけ覗かせるようにして、店内を見た。

店内は、シンと静まり返っていた。

人の姿はなく、薄暗い。

けれども、埃はなく綺麗で、棚には瓶が並べられていた。

営業はしてるけど、今はやってない時間なのかななどと考えつつ、店内に足を踏み入れた。

そのとき。

「あの…」

「うわっ」

背後から声をかけられ、ビクリと震えて慌てて振り向いた。

「あの、お客様ですか？」

「え…っと、道を…」

見ると、そこには少し変わった服を着た少女が立っていた。学生、かな

驚いた自分を恥じつつ、忘れかけてた用件を告げる。

「あの、道を聞きたいんだけど…なんか、気づいたら街路地にいてしまった、今の言い方だとおかしいかもしね。取り繕うと慌てて口を開いたが、少女が歩き出したので口を閉じるしかなかつた。

「あ、ねえ…」

少女は、真っ直ぐ喫茶店の中をつっさり、奥にある扉の前で立ち止まつた。

「いらっしゃりです、どうぞ」

扉を開くと、どうぞ、と少女は手招いた。

戸惑いつつ立ちぬくといふと、少女は少しだけ歩き足し、途中で足を止めて振り向いた。

「迷われたのでしたら、店主が導いてくれると想つのですけれど…

行かれませんか？」

「あ、いく、行きます」

他に当ても無く、仕方が無いといったよじ少女の後を追つ。

喫茶店奥の扉をぐぐり、長い廊下を進んだ。
その先に、ひとつの大好きな黒い扉があつた。

不気味な、漆黒の扉。

「…なに、こ…れ」

「店主の書斎です」

少女は、コンコンと扉をノックした。
すると、扉は音も無く開いた。

少女はとつとと部屋に入つていったので、慌ててあとに続く。
そこは、いたつて普通の部屋だつた。

客間のようで、部屋の中央に向かい合つたソファとその間に机がある。

書斎、といふことで、主人用だらう豪華な机と椅子、壁いつぱいに広がる本棚には本が所狭しと並んでいた。

「紫苑さん、お客さまだけど」

少女は、室内を見回したのち、どうぞをソファを示した。

「座つててください構いませんよ」

「あ…どうも」

断るのもどうかと思い、ソファに腰をかけた…その、ときだつた。

「加田和樹、25歳。土木作業員。家族は母が一人で、父は他界」

「えつ…?」

男の美声が、部屋に響いた。

実際は響いたわけではないだろうが、錯覚をおこすようなあまりにも美しい過ぎる声音だった。

まさに、透き通るような聲音で…。

「つー？」

な…

気づけば、目の前のソファに男が座っていた。

男、だよな…

見た目、麗しいの一言につきる。

真っ赤な唇に、長い腰まである漆黒の艶やかな髪。高い鼻に、長い睫。白すぎる肌。

どこか儂げで、浮世絵離れしている印象をつけた。

けれど、その漆黒の双眸だけは、しっかりと意識が読み取れた。
むしろ鋭く、冷利にも見える。

「なんで、俺のこと…」

言い当てられた。話してもいいのに。

「お前は、迷っているな。未練があるのか

「は…え、何が？俺、早く彼女のどこに…」

ドクンッ、とその瞬間心臓がはねた。

あれ

俺、彼女のところに戻つてよかつたっけ？

「沙希、が心配…する…から
嫌な汗が、噴き出した。

ちょっと、待て…確かに、旅館について、部屋に案内されて。
そこで。

脳裏で、記憶がフラッシュバックする。
目の前が、徐々に暗くなつていく。
そこで。

沙希が、泣いていた。

”『めんね、一緒に死んで”

そう言って、泣いていた。

もうすぐ、婚約者と結婚させられてしまつ、と泣いていた。

そうだ。

だから、一人で逃げた。

それで、見つかりそうになつて…彼女は、毒を取り出した。

”ありがとう”

承諾した俺に見せた笑みが、彼女の最後の笑顔だった。

「お前は促されるまま毒を飲み、死んだ」

美しい声音が、告げる。
あの男の声だ。

そう、だ。俺は死んだ

死んだ。

もう、この世にはいない。
死んだ、のだ。

じゃあ、なぜここにいる?

「お前にほん、未練があるからだ」

未練?

そういうえば、沙希はどうだろ?つ?

沙希。

愛しい、俺の彼女。

俺は、毒を飲んで、そのあと…。

「あつ…」

そつ、だ。

彼女は、泣いていた。

ただただ、血を吐く俺を見つめて、謝っていた。

「あ、俺、そうだ、俺」

死んだのは、俺だけだ

沙希は、毒を飲まなかつた。
迎えに来た親と一緒に、帰つていつた。

婚約者の、元に。

「あ、あ…」

ぱりぱりと、頬を涙が伝つ。
そうだ、だから死ねなかつた。

死んでも、死にきれなかつた。

「お前の、望みはなんだ」

男の声に、ハツと顔をあげた。

そこはあの書斎だつた。

自分は死んでいるといつたのに、まるで実感がなかつた。

けれど。

自分はもう、この世にいないのだ。

「お前の望み、かなえてやるわ」

そうすれば、逝ける。

あの世へ。

「俺の、望みは、ひとつだけ」

胸につつかえていた。

だから、死んでも逝けなかつた。

ずっと、愛していた。

沙希。

「あのあと…沙希は、幸せに過ごせたのか知りたい

なぜ騙したのか、とか。

愛してくれていなかつたのか、とか。

そんなこと、どうでもいい。

彼女と過ごした時間は、確かに実在したのだから。

沢山の思い出をくれて。愛しさをくれて。

とても、幸福な日々を過ごさせた。

俺は、君に会えて、幸せだった。

「見せてやる」

ふ、と男が手伸ばした。その手は上へと掲げられ、その瞬間、周辺の空間がゆがみ別の世界が広がった。
それはまるで、アルバムのようで。
一コマ一コマが、映し出されでは消えていった。

沙希、だ。沙希が、いた。

見知らぬ男と結婚している。あまり幸せそうではない。

子どもが生まれた。男の子だ。

沙希が、笑っている。

二人目の子ども。今度は女の子だ。

両親の死。沙希は泣いている。

傍には、夫と子ども。支えてくれる人がいて、沙希は幸せをかみ締めている。

長男の結婚。嬉しそうに、夫と話している。

沙希が、倒れた。

不治の病だ。

起き上がる」ともできない。

寝たきりの畳の上。

娘に話をしている。

好きなひとがいた、と。

殺してしまった、最愛のひと。
やつとそのひとのところへ逝ける。

幸せそうに笑っている、沙希。

家族に看取られ、沙希はそのまま帰らぬひととなつた。

そこで、部屋が元へと戻る。

「これが、その後だ。昭和43年6月、その者は死した
男の言葉に、ただ頷いた。

沙希は、幸せに過ぐせたんだ

よかつた。

本当に、よかつた。

はらはらと涙が止まらなかつた。

「もう、逝くがいい」

そうだ、逝かなければ。
きっと、彼女が待つてゐるから。

最期に、男を見た。

確か、紫苑と少女は呼んでいた。

「ありがと、『やじ』ます」

礼を述べると、男は無表情に、いや、と呴いた。

その瞬間、周囲に見知らぬ花の、花びらが散る。

紫の、花が舞い、あたりに散乱した。

それは、決して止むことなく、どこからともなく散り続けた。

そして、俺は、この世から完全に消えた。

あの世で待っている、彼女の元へいくために。

「…強いひと」

「あの男がか？」

うん、と佐保は頷いた。

「すごい」

「そうか…？」

ふう、と紫苑はため息をついて、傍にあつたグラスをあおった。佐保は向かい側のソファに座り、なんとなくぼうっとする。

「…学校から、直接きたのか」

佐保の姿は、セーラー服姿だ。

高校が終えてすぐに來たから、着替えている時間はなかつた。

「うん」

頷く佐保に、紫苑は苦笑する。

「…そういえば、さつきの人は、結構前になくなつたひと、なんだよね」

「…」に、時間は関係ないからな

「…」は、時折なにかが迷い込む。

それは、ひとであつたり、ひとでなかつたり。
生きていたり、魂であつたり。

見知らぬ街路地は、どいまでも続く異空間。

そこに、喫茶店がある。

どいか古風で、営業しているのかさえ怪しまれる喫茶店。

そこの店主は、少しだけ、不思議な力を持つのです。

時折やつてくる客人を、助けたり助けなかつたり。

それは、主人の気分次第。

END

(後書き)

一作目の投稿です。別サイトの小説（佐保と紫苑出会い編）の、番外となります。

短いので、わかりにくいかかもしれません：汗。

少しでも呼んでいただけたのならば、幸いです。お付き合いくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5453c/>

闇夜に咲く、紫の華

2010年10月28日07時42分発行